

P2-3 総合臨床実習におけるデイリーノートの蓄積方法への一提案 ～患者中心のファイリングによる臨床教育の考察～

○鈴木 耕平(OT)¹⁾, 木岡 和実(OT)¹⁾, 杉原 治(OT)²⁾, 西村 なつき(その他)¹⁾

1) 学校法人藍野大学 滋賀医療技術専門学校

2) 医療法人マキノ病院

Key word : 臨床実習, 教育, 作業療法学生

【はじめに】指定規則の改正に伴って実習教育の見直しが求められており、今後の実習形態の模索が必要となる。以前より本校では参加型の実習形態を提案しているものの、様々な要因により進行が妨げられることも少なくない。その一つは実習記録の作成に関連した時間であると思われる。現在、臨床実習教育における記録方法について実践・検討された報告は少ない。今回、実習記録の一つであるデイリーノートの蓄積方法の工夫を行った臨床実習指導を指導者と共に経験し、学習促進と共に学生の記録物への負担軽減の一助となると考えられたため、以下に考察を踏まえ報告する。

尚、本報告にあたっては実習学生及び実習施設へと趣旨を説明した上で承諾を得ている。

【方法】平成29年5月8日～7月7日の最終学年次の臨床実習学生を対象とした。施設は急性期から生活期の患者を対象とした身体領域で地域に密着した総合病院。

日々の活動が記録されるデイリーノートは各担当作業療法士の指導とした。実習当初、スーパーバイザーと共に学生を作業療法へと参加させつつも、学生理解を促進させる方法を検討した。学生も含めて検討した結果、日々移り変わる臨床見学の事例に対して前後の繋がりを持った学習とするために記録ファイルは患者ごとに振り分けた蓄積方法を採用した。各記録の冒頭紙面は患者の基本情報を据えるようにした。

【結果】実習期間では計42ケースの記録があった。ケース毎の作業療法場面記録日数とその件数(日数/名)は、5日間1件、4日間4件、3日間5件、2日間11件、1日間21件。関与した指導者は5名であり、それぞれに7回～13回の指導を実施。実習の半ばには学生自身からファイルへの外来・入院の色分けや、指導者名と疾患名を記載したインデックスの活用提案があり。また基本情報への追記やポストイットを活用したまとめも行っていった。記録は1ケースに対してA4用紙を1～2枚程度で、概ね記録は1時間程度を要した。

指導者へのインタビューでは「様々なケースを見学させようとしていたため、経験を蓄積するためには時系列主体よりも患者主体の記録が指導にも繋がりがもてた。」「臨床家として巣立つために、日々のカルテを参考にした記録は卒後を意識させやすいかもしれない。」とコメント。また学生からは「見学が終わった患者記録を探す時間が短縮される。」「対象者の繋がりができるため次に見学したくなる気持ちになった。」とコメントがあった。

【考察】学生の気持ちや行動の変化からは、記録を通じて学生自身の経験記録であると共に主体的に作業療法場面へと参加する姿勢へと結びついた可能性が考えられた。施設特性として、学生の経験する作業療法場面は年齢や病期、病種は多岐にわたる患者であり、実習時間経過をもとにしたファイリングでは再度見学した患者を遡って振り返るだけでも時間を要することが予想される。さらに、見学した一定期間後ではファイル内を探索し終えた後にも想起する時間が必要かもしれない。そういった点において学生コメントにある「探す時間が短縮する」という内容や蓄積方法の工夫に対しての主体的行動は、順次変化する状況に対して患者中心に情報整理がなされていたと考えられる。結果として総体的な記録時間の短縮に繋がっていたのではないかと考えられた。同様に、指導者は指導の繋がりについてコメントしており、日数を跨いだ表記であっても2回目以降の記録に対して介入の変化や課題などを共有しやすかった可能性が考えられた。